

## 5. 唾液腺疾患における核医学診断の検討

野口 一成 中條 政敬 田之上供明  
岩下 慎二 中別府良昭 (鹿児島大・放)

唾液腺疾患における  $^{67}\text{Ga}$  シンチグラフィと  $^{99\text{m}}\text{Tc}$  シンチグラフィの有用性について検討した。対象は病理学的に確定がついた症例で、 $^{67}\text{Ga}$  シンチ 22 例、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$  シンチ 12 例であった。 $^{67}\text{Ga}$  シンチでは、軽度あるいはそれ以下の集積を示した症例では 94% (14/15) が良性で、中等度以上の集積を示した症例は 6 例中 3 例が悪性であったが、シアログラフィ先行の良性例 2 例を除くと 4 例中 3 例が悪性であった。したがって、シアログラフィ非先行例での  $^{67}\text{Ga}$  シンチは良悪性の鑑別に有用であると考えられた。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$  シンチでは、病変部は、Warthin 腫瘍 3 例中 3 例、唾石症 1 例で Hot を、他の良性疾患 5 例と悪性疾患 3 例では正常以下の集積を示した。また両シンチにおいて、集積程度の判定には病変部を正確に同定し、側面像での判定が必要であると考えられた。

6. 甲状腺の  $^{201}\text{Tl}$  delayed image 撮像開始時間の検討

田之上供明 中條 政敬 岩下 慎二  
野口 一成 (鹿児島大・放)

甲状腺疾患の  $^{201}\text{Tl}$  シンチグラフィの delayed image の撮像開始時間を、甲状腺疾患疑診例 43 例の 1 時間と 3 時間に撮像することによって検討した。 $^{123}\text{I}$  と 5 分目  $^{201}\text{Tl}$  image とそれ組合せた視覚的診断は Diffuse goiter, cyst, adenoma, malignancy に分けて、3 人で行ったが、その診断一致率は 1 時間目で 94.6%、3 時間目で 91.5% で有意差は認められなかった。また定量的には各疾患群での control 部に対する病変部の count 比を 5 分、1 時間、3 時間目で求め、1 時間/5 分値、3 時間/5 分値を比較したが、各疾患群で有意差はみられなかった。したがって、delayed image は 1 時間目、3 時間目のいずれでも良いと考えられた。

7.  $^{201}\text{Tl}$  SPECT を用いた肺癌の評価

本多 信茂 石橋 正敏 佐藤 光隆  
藤本 公則 吉居 俊朗 高橋 一之  
野村 保史 森田誠一郎 大竹 久  
(久留米大・放)

今回、われわれは  $^{201}\text{Tl}$  SPECT を用いて、肺癌およびその転移巣の評価を行った。対象は、病理組織学的に原発性肺癌と診断が確定した 7 例である。 $^{201}\text{Tl}$  222 MBq (6 mCi) 投与後 10 分に SPECT を施行した。収集方法は 64 方向 360° 収集で、一方 20 秒収集である。得られたイメージは transverse, coronal images である。原発巣への集積は全例にみられ、その最小腫瘍径は約 2 cm であった。リンパ節腫大も 2 cm 以上になると集積が見られた。

$^{201}\text{Tl}$  SPECT による肺癌の診断への応用は有用であり、今後症例を重ねて検討する価値があると思われた。

## 8. 肺癌における F-18 FDG-PET: 特に治療との関係について

一矢 有一 桑原 康雄 大塚 誠  
吉開 友則 福村 利光 神宮 賢一  
増田 康治 (九大・放)

肺癌における F-18 FDG-PET について、特に治療との関係について治療効果の判定や予測に役立つかどうかを中心に検討した。対象は、未治療の肺癌 20 例で、FDG-PET 検査は治療前には全例に、また 8 例には放射線治療終了直後にも行った。F-18 FDG の腫瘍への集積は、投与 45~60 分後の腫瘍/筋肉比で評価した。治療前の検査では、全例で腫瘍部に高い集積がみられた。組織分類と FDG 集積程度との間に差はなかった。治療前の FDG 集積程度と治療による腫瘍の縮小効果との間に差はなかったが、比較的集積の低かった 2 例では、腫瘍の縮小がみられなかった。治療前後における FDG 集積の変化と腫瘍縮小との関係では、NC に比べて PR の方が低下の程度が著明であり、かつ治療後の集積程度も低かった。